

## 『沖繩（シマ）という窓』が終わる」

2024年04月08日

岩波の月刊誌『世界』で、2008年から長期連載していた「沖繩（シマ）という窓」は、沖繩からの真っ直ぐな声を聞けるコラムとして、私は愛読し、多くを学んできた。3月号で終わり、残念である。山城紀子氏と松元剛氏で始められ、親川志奈子氏が加わり、最終号は、親川氏が「人権をあきらめない」と題して寄稿している。

沖繩では「自己決定権」という言葉が市民権を得て、沖繩の自治権の決意表明が、民主党時代に鳩山由紀夫元首相から新基地は「最低でも県外移設」との言葉を引き出した。しかし、米国の圧力に日本の官僚たちが忖度する形で、鳩山元首相はあつという間に失脚させられた。翁長雄志氏が沖繩県知事に選ばれて、「イデオロギーよりアイデンティティ」との言葉に、辺野古新基地建設反対の決意は沖繩を一つにした。だが、米軍基地は島中にあり、女性も暴行され、殺害され、オスプレイは落ちてくる。何も変わらず、新基地建設は進む。デニー知事誕生には皆、カチャーシーを踊り、喜んだ。現実には、琉球の島々に自衛隊基地が建設され、住民への説明がないまま、聞かされていない施設が増えていった。2017年には、沖繩観光客数がハワイを超えたが、順調だった沖繩経済はコロナにより打撃を受けた。フェンスを隔てて「米軍」がある沖繩では、感染対策の脆弱性が露わになった。

2022年は「復帰」50周年だった。太平洋戦争では、「捨て石作戦」で沖繩県民を巻き込んだ激戦地となり、4人に1人が命を落とした。日本の独立のために沖繩は米国の質草にされた。日本国憲法の下で本土並み復帰を目指したが、本土にあった米軍基地は沖繩に移され、自衛隊基地も奄美、宮古、石垣、与那国に建設されている。米軍基地のためには莫大な税金を投入し、地位協定の下で、米軍の加害は不問にされ、県民の人権は抹殺され続けた。基地負担は増え続け、この負担が次世代の県民に押し付けられている。

親川氏は、沖繩の変わらない現実を踏まえ、次のように書いている。「十数年書いてきたものを読み返してみて、私がその時々にも訴えたかったもの、知ってもらうことで改善したかったことのうち、一つでも解決できたもの、食い止められたものがあつたらうかと考えた。しかし残念ながら何度読んでも一つだつて『勝利』はなかった。」日本政府は沖繩県民のアイデンティティを顧みることなく、米軍の要求に応じて基地増強を進め、沖繩への構造的な差別と抑圧を変えることは、何一つできなかつたと嘆いている。ところが最後に、「時々すべてを投げ出したい気持ちになるが、その度に誰かの『あきらめない』という決意が聞こえてくる。何をあきらめないのかということ、私たちは人権をあきらめない。私も窓から『あきらめない』と声を出してみた」と締めくくっている。

2015年に日本ジャーナリスト会議の全国交流集会「沖繩平和の旅」に参加した。沖繩タイムス社、琉球新報社の記者たちの話を聞くことができると思ったからである。「聞け、沖繩の民意」というタイトルでティーチインが開かれ、記者たちは自分たちの報道は沖繩では支持されているが、本土には届いていないと苦悩に満ちた報告があつた。辺野古の海に行った時、工事はまだ行われておらず、海はきれいであつた。案内者から「あなたがた百田さんのお友だち」と言われ、驚いた。百田さんとは百田尚樹氏のこと、沖繩タイムス社、琉球新報社を潰せと言つた右翼の言論人である。辺野古に来る人は新基地建設に反対する人だろうが、本土から来た人は皆、百田さんと同じと見ている沖繩の人の思いを知らされた。新聞の意見広告に参加するくらいで、何もできないが、親川氏の「窓」から発する「人権をあきらめない」という声をしっかり受け止めたいと思う。